

「環境」という「危険」をどう捉えるか

東日本大震災を振り返り、我々が生きている環境という「危険」をどう捉えるかについて、考えてみました。出発点にしたのは、「水の環境戦略」中西準子著（1994年 岩波新書）です。環境問題を問いかけることが行政と対峙する時代に、環境リスクを訴え続けた「筋金入り」の見識です。

私たちは、『人間の手つかずの天然』を知りません。日本に残る『手つかずの天然』は『人間を拒む天然』でもあるのです。ですから『人間の手つかずの天然』に触れる機会は、全くといっていいほどありません。人が『手入れ』をした田園と里山は自然＝半人工物であって天然ではありません。

また、『自然』という概念はギリシャ哲学～キリスト教の概念で、『人間が(神に変わって)管理する』もので『天然』を拒否し、全てを人間の都合の良いように作り直すことを前提とする宗教です。エコロジストと言われる人たちはこの宗教に染まっている人々です。

例えば、CO₂削減が叫ばれていますが、かつての地球は酸素濃度が非常に低く、炭素濃度が非常に高かったのです。それが、極端に毒性の強い酸素が増え、地球は汚染され、大気の影響を受ける場所に住んでいた嫌気性の生物は絶滅しました。炭素が増え、酸素が減るのは「汚染」でしょうか、それとも「浄化」でしょうか？どの生物の立場から見るかで「汚染」か「浄化」かが決まります。生物科学の立場から言えば、「汚染」か「浄化」かは「宗教」の問題、物理学的に言えば「純粹に心理学的な問題」です。

「アマゾンの森林を残せというのは、ブラジル国民にとって迷惑な話である。途上国にとっては、たとえそれが自然破壊になるとしてもダムが必要なことはあるだろう」という記述は、中西氏がエコロジストとは違って真っ当な人物であることを示しています。

公共部門と行政が関与する部門の異常な不効率が、日本国民を貧しくしていることが指摘されます。「行政機関の縄張り争いと、管轄の工事量を増やしたいという意識」は、今日の日本の経済的・社会的停滞の最大の要因であり、環境リスクを増大させてもいます。

また、「水循環を行うには、汚れをどこまで許容できるかを考える科学と、覚悟と、市民の合意が必要になる」という問題提起をされています。「そもそも絶対安全というのが存在しない。安全とは、ベネフィットに比べてリスクが少ないという意味である。何がベネフィットなのかという価値判断抜きに、安全か危険かは判断できない」。「リスクとベネフィットと取引無しには、この世は成り立たない。取引自体が悪いのではなく、どう取引するかが問題なのである」。

津波で人が死なないようにする為には、海岸線を巨大な防波堤で覆いつくし、人間が海と触れる場を一切無くさなければなりません。それが「人間として生きる」ことなのかを、人間は選択しなければなりません。「生きていること自体が危険なこと」なのです。だから「安全のため」には「生きているとは言えない」状態が望ましいのです。それが、「人間の幸せ」だと言うなら「人間らしく生きることを止める」べきです。

中西氏は吉野川第十堤の例を挙げています。「これまで80年に1回の洪水に耐えられるように作られていた堤を150年に1回の洪水に耐えられるようにするという名目で、現存する堤の下流にもう一つ大きな堤を建設する計画」。「徹底した自然破壊と城塞のような堤防で川を私達の暮らしから隔離してしまう」。つまり、洪水で人が死ぬ事を許容しなければ『天然を完全否定する』しか道は無い。それが嫌なら、天然に与えられた人間の生命の危険を受け入れなさい、と言うのです。死すべき人の定めから言えば当然の道理を受け入れないのなら、人類絶滅の道を進みなさいという訳です。

それに、「安全が錦の御旗にならないように注意する」べきだと主張します。それによって役人は私腹を肥やすのですから。

さらに、「公害問題の解決に身を捧げてきた人たちは、環境問題に冷淡である。地球環境問題には研究費が与えられるが、公害問題の研究では研究費どころか、大学の教官の地位すら奪われるような状態であった。身を挺して研究してきた人たちにとっては、その当時は「迫害者」の立場にいて、今になって環境専門家を名乗る研究者を信用できない」と中西氏は言います。「環境派」は多数派です。真剣に考えることなく、皆と一緒に楽だから、金儲けになるから、人気取りのため、票集めのため、世論を動かして権力を得たい、それがエコなのです。環境問題を真剣に考えている人物がエコである筈がありません。

中西氏は、市民の覚悟も問います。「循環とはやや汚れた水を使うことである」「多くの人が水循環を主張しているが、本当にこういうことを覚悟しているだろうか？」と。

「様々な手を尽くし、最後は、自然の悠久の中で安全を保障してもらうしかないのが、人間という生き物であり、人間の持つ科学の限界なのだ」という中西氏の言葉に、不見識なエコロジストとは次元の異なる、『身の程を知る』科学者の姿を見ることができます。

「災害に強い町づくり」は金になります。現に東北大震災の被災地は震災バブルで潤っています。「人が死なない町づくり」は、震災を経験した人々の心理としては理解できます。ですが「人が死なない町」は「人間の生きる町」ではないことを忘れてはなりません。

人間としてどういう信念を持って生きるのかが問われています。私は、(計算上で)60年に1度の津波や増水から守ってくれ護岸や堤防以上のものは要らないし、1万分の1以下の発ガン(増加)率は気にしない。「運が悪ければ死ぬ」それが「天然の生き方」なのだから。そういう、全人格を懸けた見識が、マーケティングにも必要になっています。

ビジネス倫理は、安全ビジネスや環境ビジネスを許容するのか？人間の安全な生活は、どのような基準で評価し実現されるべきか？それは「純粹に心理学的な問題」であるだけに、真剣に考えないと、一夜にして世論の風向きが変わり、夜が明けたら株価が半分以下になる、ということも充分にあり得ます。